

公共図書館における新聞記事情報提供サービスの可能性 —佐浦・山下論文へのコメント—

Possibility of providing local newspaper articles as the information service in the public libraries : Comments to Saura and Yamashita

経営学部 荻原幸子

School of Business Administration Sachiko OGIWARA

Keywords : local information services, public libraries, newspaper articles

1. はじめに

そもそもは佐浦氏が卒業研究としてまとめられた論文について、図書館情報学分野における公共図書館研究の立場からのコメントを求められている。

一読した限りでは、今まさに「情報提供サービス」の実施が声高に叫ばれている公共図書館に、最新の情報技術を導入するというテーマ設定自体に興味深く受けとめた。また、学部学生により執筆された論文ということでは、情報提供サービスとRSSの現状を、複数の文献に基づき簡潔明瞭にまとめ上げている前半部分の質の高さも注目された。

一方で、何度か読み返すうちには、「筆者（荻原）ならばこうする」というような、「物言い」を付けたい部分が何箇所か見受けられた。以下、それらを4点にまとめて表すことで、この任を果たしたい。

2. 論文に対するコメント

一点目は、「地域資料の提供から地域情報の提供へ」という観点の不足である。1章では研究目的として“RSSを用いた地域情報提供サービスを提案すること”と明示されており、そして全体を通して本論文は「地域に関する新聞記事を情報として提供する」ことを目指していると理解される。ところが、2.2.では地域資料の多様性や特徴が、続く2.3.以降は地域資料の一つであるという位置づけで、地域に関する新聞記事の提供が論じられるにとどまっている。本論文の趣旨からすればここでは、地域資料について以上に、インターネットを含めた情報技術による「地域資料に収録された情報の提供」が言及されるべきであったと考える。地域資料のデジタル化による情報提供に関しては、2.2.で掲げられている「これからの図書館像」等の政策文書の他、各種の文献で実践事例などが紹介されている。ま

た、地域に関する新聞記事についても(2.3.)、厚木市や日野市などのようなスクラップの事例と、立川市やつくばみらい市等のインターネットを活用した事例とは、区別して整理される必要があった。

二点目は、本論文の真骨頂である4章の「具体的な提案と実装」についてである。4.1.の限りでは、図書館による現在の提供方法では、新聞というメディアの特質である即時性に欠けるという課題を設定し、その解決策として、地域に関する新聞記事のRSS配信を提案していると捉えることができる。RSSは、速報性が求められる情報の提供や取得に適したメディアであることも明示されている。この設定は合理的であり、共感するところが大きい。しかしながら4.2.以降では、即時性の追求と併せて、新聞記事データベースの構築による遡及性（過去の記事検索の実現）が目指されている。このことは、“地域の問題を考えるため、過去のニュースを調べたいとき”、“自治体職員が・・・過去のニュースを調べる利用も考えられる”とするニーズの提案(4.2.)や、各記事に対するキーワード登録を作業プロセスに挿入している点(4.3.)などから読み取ることができる。実はこのような一挙両得の発想は、残念ながら、本研究における実装の価値を逆に半減させている。即時性の追求のみを念頭に、ニーズの提案や実装作業、および考察がまとめられたならば、提案されたシステムの有用性や課題は、より整理された説得力をもつものとなったのではないかと惜しまれる。例えば、考察(5.1)で指摘されている、一連の作業にかかる時間の短縮や、記事の登録作業における簡便性の追及などは、即時性の追求という側面では最も重視すべき課題であり、これに対して、記事の重複や採録方針などは二の次となるといった、メリハリのある展開になったのではないだろうか。

三点目は、4.5.における類似サービス(47News)との比較についてである。競合サービスとの比較は、本システムの意義を明確にする上で有効な設定である。ただし、本文

中からはその意義がどうも読み取りがたい。47News との最大の違いは、扱う記事の範囲が、新聞社単位ではなく、自治体単位であるということであろう。すなわち、福島民報のような地方紙（県紙）に掲載される記事は、県内の全自治体に関する内容が混在している。一方で本システムでは、須賀川市という一自治体に限定している。この違いを明確に提示するべきではなかったか。

さらに（4点目）、以上のように本システムの機能を、一つの自治体に関する新聞記事情報の即時的な配信であると集約するならば、ニーズの提案(4-2.)では、より現実的な提示が可能となる。例えば、自治体住民、自治体職員、地方議員に対しては、未知の出来事を知らせるのみならず、既知の出来事を記事によって振り返るきっかけを提供することにもなる。一日の活動の前に、合間に、終わりに、RSS で配信された記事に目を通すことを想定すれば、得られた情報は、それぞれの仕事や日常会話の話題として活かされることになるだろう。他の自治体に居住している当該自治体の出身者については、郷里を懐かしく思いつつ目を通す状況が想定されるほか、地元の家族や旧友とのコミュニケーションの糸口となる情報入手回路を提供することになるのではないだろうか。会話やコミュニケーションを誘発するという点では、4-4. でわずかに言及されている、

コメントやトラックバックの機能を活用した一工夫が大いに期待されるところとなる。

すなわち、多様な情報があふれている現状において、あえて一つの自治体という限定された情報を配信することの価値が深く追及されるべきであった。実はこのことは、本システムの運営を、なぜ公共図書館が担うのかという問いに対する答えにも通じている。すなわち、自治体の税金によって設置・運営されている公共図書館が実施することの妥当性は、この観点においてこそ明確になるはずなのである。

3. おわりに

もとより卒業研究としては、「ナイスファイト」かつ「グッジョブ」であることには変わりはない。筆者（荻原）自身も多く知見が得られた。従って、上記4点の物言いについては、むしろ佐浦・山下両氏へのエールとして受けとめて頂ければ幸いである。また、異論等があれば、ぜひ聞かせていただきたい。

併せて、ネットワーク情報学部の学生さん達が、その若い感覚で、これからも図書館関連の研究に取り組んでいたいただければと期待している。